

はじめに

香月 洋一郎

「人類文化研究のための非文字資料の体系化」をテーマとする神奈川大学のCOEプロジェクトは四つの班から構成されている。私達の属する第三班は「環境と景観の資料化と体系化」という分野を担当しており、本書はこの班の、班としての第一冊目の紀要になる。

もちろんCOEプロジェクト全体の紀要は年報として毎年刊行されており、私達はそこに執筆する義務ももっているのだが、研究者が40人ほど関わる大きなプロジェクト全体の年報だけに、論考の容量やレイアウト上の都合、また編集期間などに様々な制約を設定せざるを得ない一面ももっている。もう少し自由な形で自分たちの論考集を編んでみたいと班の内部で検討し成ったものが本書ということになる。

班としての第一冊目の紀要になる、と記したが、こうした形や内容で逐次二冊目、三冊目と刊行していくかどうかは今の段階では明確ではない。私達の班に限らず、今後プロジェクト全体としてでなく班単位でも様々な刊行がなされると思われるのだが、その各々はその班の作業状況や必要性に応じてのもの——たとえば資料目録や資料集など——の刊行になるとと思われる。それは私達の班と同様である。

元来、日々の暮らしとは保守的な性格をもっている。その日々の暮らしの領域や権利を反映する景観は、内に伝承力を潜めつつも、一見ごくありふれた相貌で眼前に広がっている。よほど大きな天変地異か政治変動がない限り、そこでの暮らしは、ゆったりとした変化のなかで営まれていく。ここで私達が切り口としているのは実はその二つ、日々のありふれた生活を写しだしている景観と、天変地異、政治変動のなかでのそれになる。共同研究である以上、この二つ対象へのアプローチの関係性や、各々のアプローチの中に浮かぶ景観像の関連をみていくことが次に必要とされる作業であり、さらにまた「環境」というより大きな概念の中でそうした「景観」の姿をどう位置づけ得るのか、位置づけつつも「環境」という概念をどう考えていくのか。そうした問いがそのむこうにある。

大きなしかも漠然としたテーマのもとで、各々手さぐりですすんできたこの二年近くではあるが、そろそろ各自の作業を少し自由な形でテーブルにあげ、外からも検討していただき、内部においても互いに確認することが、私達の班ではこの時期に切実に必要とされているように思う。本書はそのための刊行になる。

大方の御叱声、御教示をお願いする次第である。

